

久留米大学

比較文化研究所年報

第 18 号

2024

比較文化研究所年報

第 18 号

2024

目 次

はじめに	1
比較文化研究所の概要	2
活動報告（2024 年度）	
1. 研究部会報告	
(1) 地域博物館研究部会	5
(2) 文化財保存科学研究部会	7
(3) 欧州研究部会	8
(4) 心理教育研究部会	9
(5) 日本・アジア比較文化研究部会	10
(6) 歴史科学研究部会	12
(7) 筑後川流域圏研究部会	13
(8) イスラーム研究部会	16
(9) 地中海地域研究部会	17
2. 特別研究員 B・研究員発表	19
3. 日誌（運営会議、研究所会議等）	21
施設・設備	22

はじめに

比較文化研究所長
原口 雅浩

2024 年度の活動報告として、久留米大学比較文化研究所年報第 18 号をお届けします。

本研究所は文系大学院の設置母体として出発し、主に比較文化研究科設置に貢献するとともに教育・研究をも担ってきました。その後、2001 年から専門研究部会が設けられ、当初の 5 部会から 13 の研究部会にまで増えました。それぞれの研究部会では、調査研究、そして地域にも開放された公開講座、シンポジウムやセミナー等の様々な研究活動を行っているところです。2024 年度に研究部会活動を見直し、研究部会の研究計画・研究活動・成果の評価にもとづいて研究所予算を配分することになりました。その結果、2025 年度からは、10 研究部会になります。

これまでも比較文化研究所としての学際的・総合的研究活動の推進と、成果の社会還元を続けてきましたが、今後も一層の共同研究の進展は必要であると考えられます。

本研究所の活動が、所員や地域の方々を始め様々な関係者に支えられてきたことに感謝申し上げ、今後とも関係各位の皆様のご指導、ご支援を頂きたく宜しくお願い致します。

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」（比較文化研究所規程）であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものです。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長（現在の比較文化研究科長）が兼任しておりました。

その後2001年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も大学院担当教員を中心にその他の希望する専任教員にまでその枠が広がられました。

研究所では、多くの研究部会を組織しそれぞれのテーマで活発な研究活動を行うとともにその成果の公開に努めています。

ほかに研究所としての活動として、次のような研究プロジェクトを実施してきました。

まず、2006年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究」を開始しました。2006年度～2007年度においては大川地域、2008年度～2009年度においては旧三潴郡、2010年度～2011年度においては旧久留米市、2012年度～2013年度においては、うきは市および朝倉市、2014年度からは日田地区を実施し、それぞれの地域の『研究報告書』を発行してまいりました。以上の研究プロジェクトは2015年度をもって終了しています。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。

2024年度においては次のような組織・体制となっております。

組織体制

所 長	原口 雅浩（2024. 4. 1～2026. 3. 31）
所 員	2024年度：78名（専任所員なし） 大学院比較文化研究科後期博士課程の教員 20名 大学院心理学研究科後期博士課程の教員 8名 任意に加入する助教以上の教員 50名
特別研究員	2024年度：14名
研究部会研究協力者	10名 （文化財保存科学研究部会 7名、筑後川流域圏研究部会 2名、筑後川流域圏研究部会/日本・アジア比較文化研究部会/地中海地域研究部会 1名）
研 究 員	2024年度：5名

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2024年度における研究部会は以下の通りです。

- 1) 地域社会経済研究部会（部会長 松石 達彦教授）
- 2) 地域博物館研究部会（部会長 吉田 洋一教授）

- 3) 文化財保存科学研究部会（部会長 大庭 卓也教授）
- 4) 外国語教育研究部会（部会長 李 偉教授）
- 5) 地域精神保健福祉研究部会（部会長 坂本 明子准教授）
- 6) 欧州研究部会（部会長 大場 はるか准教授）
- 7) 心理教育研究部会（部会長 園田 直子教授）
- 8) 会計専門職研究部会（部会長 杉野 博貴教授）※休会
- 9) 日本・アジア比較文化研究部会（部会長 ランブクピティヤ・ディヌーシャ教授）
- 10) 歴史科学研究部会（部会長 福山 裕夫教授）
- 11) 筑後川流域圏研究部会（部会長 葉山 アツコ教授）
- 12) イスラーム研究部会（部会長 佐々木 拓雄教授）
- 13) 地中海地域研究部会（部会長 畠中 昌教准教授）

研究員は、後期博士課程を満期退学した者で、その後も研究を続け博士学位論文の作成を目指す者等が含まれます。指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

<審議>

比較文化研究所には、主として次の2つの審議組織があります。

研究所会議：所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する審議を行います。

運営会議：所長、研究部会長からなる組織で、14名の委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な審議機関となります。

また、学部等との連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれています。協議会は、所長、副学長、学部長、大学院研究科長、所員の教授5名によって組織されています。

<研究成果の公表>

『比較文化研究』

研究所の紀要として原則として年1回発行しています。1987年に『比較文化研究所紀要』第1輯を発行し、1993年発行の第14輯からは『比較文化研究』と改称しています。

また、2009年度より査読制をとっております。

第60輯の主な内容は、以下の通りです。

『比較文化研究』第61輯(2025年3月発行)

[論文]

ガーダ・イマーム

アラブ現代詩に於ける広島イメージ

池田 博章

地域社会における一人暮らし後期高齢者の交流状況が日常不安と相談先に与える影響：久留米市の高齢者調査の結果を基にして

『比較文化研究所年報』（本冊）

比較文化研究所における1年間の研究成果の報告および学外への周知を目的に、2008年度(2007年度の報告)より発行を開始しました。

各研究部会・研究員の研究成果の公表

各研究部会などにおいても出版物等による研究成果の発表が行われています。

詳細につきましては、各研究部会等の報告(後述)をご参照ください。

また、2006 年度から年度末に研究所セミナー(活動報告会・交流会)を開催し、その年度における研究成果の発表が行われています。なお、2019 年度から 2023 年度までは、新型コロナウイルス感染拡大の現状を鑑み、開催しないこととしました。また、研究員研究発表会についても開催しないこととしました。2024 年度の研究所セミナーは、2025 年度から研究部会活動を見直し、研究部会の研究計画・研究活動・成果の評価にもとづいて研究所予算を配分することから、過去 3 年間の所員・研究員等の詳細な活動実績を提出いただき、昨年同様、開催しないこととしました。

活動報告（2024 年度）

1. 研究部会報告

地域博物館研究部会

部会長 吉田 洋一

運営（研究）テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と協力・連携し、歴史的環境を保持しながら地域文化の次世代への継承を目的としている。

運営（研究）計画

- ①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察
- ②筑後川水域関連資料の保存・収集（学生への還元）
- ③久留米大学関連資料の保存・収集（学生への還元）

2024 年度の活動報告

①史料調査

2016 年度より「(仮) 久留米藩政史料」(本学御井図書館所蔵)の調査を継続中である(詳細は『久留米大学比較文化研究所年報第 10 号』2017 年、参照)。

【2024 年度調査実績(調査年月日: 当日参加人数)】

2024 年 4 月 20 日(土): 5 名、5 月 18 日(土): 3 名、6 月 8 日(土): 2 名、7 月 27 日(土): 3 名、8 月 17 日(土): 3 名、9 月 21 日(土): 3 名、10 月 26 日(土): 4 名、11 月 30 日(土): 2 名、12 月 21 日(土): 2 名、2025 年 1 月 25 日(土): 4 名、2 月 22 日(土): 4 名、3 月 29 日(土): 4 名

参加者一覧(所属などは 2024 年度)…吉田 洋一(本学文学部)、小澤 太郎(久留米市役所)、杉谷 善子(本学研究生)、藤木 郁名(本学学生)、中川 壽賀子(八女市立図書館)、板橋 皓世・花田 洋子(木曜古文書会)

②ニューズレター(第 12 号)の発行

CONTENTS

- 寄稿文「地域の歴史遺産と大学の役割」吉田洋一



- **講座参加記（中津アーカイブズ講座）**

同講座は、高校生・一般大学生を対象とした「初級者の部」、大学3年生以上で古文書やアーカイブズを専攻している大学生・大学院生、中津市が開催している「古文書を読む市民講座」を受講している市民を対象とする「中級者の部」に分かれています。「初級者の部」では、市内の関連史跡見学や資料の保存や修復技術についてのセミナー、襖の下張り剥がし体験などを行います。「中級者の部」では、実際に古文書を使つての目録作成や、写真撮影、襖の解体、下張り文書剥がしを実習として行います。



- **九州の図書館・博物館（中津市歴史博物館・学芸員 三谷紘平）**

2025 年度活動計画

- 筑後川流域圏及び有明海沿岸地域を中心とした現地調査や史料の探求・公開、外部講演などの成果を、学生や市民へ還元する。
- ニュースレターの発行

本年度は、筑後地方に継承される伝統工芸を顕彰するために、以下のような活動をした。

狩野啓子・神本秀爾編『和紙と藍に魅せられて - 筑後の伝統工芸 - 』修訂再版の公刊と寄贈

本書は前年度に報告したとおり、文学部創立三十周年記念出版物として、令和四年三月に公刊されたが、各方面から相応の好評をもって迎えられてほどなく在庫がなくなり、また若干の加筆修正が必要な箇所が複数見出されたこともあり、本年度に修訂再版本を出版する運びとなった。そこで本書を関係する各方面に寄贈することとし、その郵送費を本部会の予算から捻出することとした。なお、本書は文化財保存科学研究部会のホームページにおいて全文を電子公開し、あるいは本部会が発刊する印刷物「伝統工芸の国・筑後」において随時部分的に公開してゆく計画であることを付記しておきたい。

「伝統工芸の国・筑後」第六号の発行

今号は大庭が聞き手となり、八女の手漉き和紙を用いて張子面などを創作している作家宮松喜久三郎氏のお話を、「〈対談〉八女和紙を使う - 張子面、張子人形、団扇、錦絵 - (上)」と題して編集のうえ掲載した。主に、うきは市で行われた催事「お祭り横町」で頒布された張子の狼面のお話である。筑後地域を拠点として八女の和紙を用いた創作活動を精力的に続けておられる芸術家のお話は、筑後地方における伝統工芸の顕彰に大きな活力を与えるものである。宮松氏のお話は二回に分けて掲載する予定で、目下、後半部分「〈対談〉八女和紙を使う - 張子面、張子人形、団扇、錦絵 - (下)」の編集作業を進めている。なお今号も既刊号と同様、本部会のホームページにおいて公開し、広く伝統工芸愛好の士の閲覧にそなえることとしたい。



本年度も昨年度に続き、ヨーロッパ関連の教育研究活動に予算を使用した。9月～12月にかけては、昨年から協議を続けてきた石橋文化センターと商店街の久留米絣の店舗「風のおくりもの」とのコラボレーションにより、大場ゼミと高木ゼミを中心に「瓶詰めポプリ」の制作活動を行った。この活動は廃棄予定の物品を活用した「アップサイクル」の活動で、「持続可能な社会」に貢献することを目的にしていた。この目的の下、空き瓶の提供を後期に入ってから教職員に依頼し、石橋文化センターの「バラフェア」の際に剪定される廃棄予定のバラを10月に教員が回収した。11月には「風のおくりもの」の店舗から衣服制作の際に生じた廃棄予定の絣の切れ端を受け取り、12月5日に学生たちに「瓶詰めポプリ」を制作させた。制作したポプリは、学生課や教務課、御井図書館など学生が普段からお世話になっている学内のカウンター、学生のアルバイト先に無償で提供した。提供する際には、学生が「ロスフラワー」と「アップサイクル」に関する説明と注意喚起を記したカードを添えた。ポプリには、乾燥させたバラのほか、少量の木製チップとアロマオイルを加えた。

11月18日には、福岡市在住のフランス人イラストレーターであるヴァンサン・ルフランソワ氏を招いて講演会を実施した。日本で出版された日本語の漫画をフランス語に翻訳し、フランスで販売する際にどのような工夫がなされているのかを、日本語と英語で学生向けに講演していただいた。

このほか、本年度は大場がパッサウ大学との間でオンライン同時双方向型の探究型学習を実施し始め、この関係でパッサウ大学と久留米大学の協定締結の話がもちあがっていたため、大場が8月末～9月末にかけてミュンヘン大学とパッサウ大学を訪問し協議を行った。ミュンヘン大学からは、来年度日本語ができる学生たちがこの手の授業に参加する予定。この協議・調整のため、大場の出張費の一部を本年度は欧州部会から支出した。

以上のような活動を積極的に実施してきたが、所属教員のスケジュールが合わず研究費をもつばら大場が使う結果になっており、共同研究には至れていないため、欧州部会は解散することになった。

「瓶詰めポプリ」の活動は、今後は久留米ユネスコ協会とのコラボレーションで引き続き実施していく予定である。

心理教育研究部会

部会長 園田直子
企画責任者 安永 悟

心理教育部会で2024年度に実施した活動内容を報告します。本部会では「協同教育研究会」と銘打って協同教育に関する研究会を続けています。今回は第60回と第61回の活動内容を報告します。本研究会は日本協同教育学会（九州支部研究会）、全国個集研（久留米地区研究会）および初年次教育学会（初年次教育実践交流会）の公認を受けています。

1. 第60回 協同教育研究会

テーマ：「協同探究活動の実際と課題」 日時場所：2024年9月28日（土） 御井本館13BC教室

主催：協同教育研究所「結風」 後援：久留米大学比較文化研究所

プログラム：

- | | | |
|------------|---------------------------------------|-------------|
| (1) 挨拶・導入： | 安永 悟（久留米大学） | 14:00～14:35 |
| (2) 講演： | 「全学的なPBL教育の展開と到達点および課題」
長濱文与（三重大学） | 14:40～16:10 |
| (3) 全体討議： | 「嬉々として学び合える学生の姿をもとめて」
安永 悟（久留米大学） | 16:25～17:15 |
| (4) 連絡・閉会： | | 17:15～17:20 |
| | ○情報交換会（学内レストラン・樺） | 18:00～17:00 |

総括：

本研究会では、探究活動を中核に据えた授業を検討対象として、三重大大学の実践を手がかりに、参加学生が嬉々として学び合い、共に変化成長する喜びを共有できる授業づくりはいかにあるべきか、について検討しました。全体討議では「学び合い苦手学生」という概念で学生を区別することの意味とその影響についても意見交換が行われました。参加者は、研究会38名、情報交換会25名でした。

2. 第61回 協同教育研究会

テーマ：「学び合い苦手学生」 日時場所：2025年3月1日（土） 御井本館13BC教室

主催：協同教育研究所「結風」 後援：久留米大学比較文化研究所

プログラム：

- | | | |
|--------------------|-------------------|-------------|
| (1) 挨拶・導入： | 安永 悟（久留米大学） | 13:30～13:35 |
| (2) ワークショップ「哲学対話」： | 馬場智一（長野県立大学） | 13:35～17:05 |
| (3) 閉会・連絡： | | 17:05～17:10 |
| | ○情報交換会（学内レストラン・樺） | 18:00～20:00 |

総括：

本研究会では、哲学対話のワークショップを体験し、哲学対話を各自の現場でどう活かせるかを中心に検討しました。最初に、哲学対話の歴史、実践形態、理論についての解説があり、哲学対話の全体像を共有しました。その後、「理由ある反論」「質問ゲーム」「接続ゲーム」など、言葉や論理に関する簡単なゲームを行いました。そのうえで、グループごとに問いを出し、哲学対話を実際に体験しました。そして最後に、ワークと対話を振り返り、「学び合い苦手学生」の指導にどのように活かせるかについても話し合いました。参加者は、研究会58名、情報交換会28名でした。なお、研究会には中学校2年生が一人参加していましたが「最初は緊張したが、楽しかった」というコメントが印象的でした。

2024 年度全体テーマ「越境」について、以下の例会を実施した。

第 1 回「アイヌ文学」10 月 25 日 比較文化研究所会議室 発表者：浦田義和（研究協力者）

本発表は、10 月 25 日旭川市の北海道教育大学旭川校で開催された日本社会文学会 2024 年度秋季大会「内国植民地主義の 155 年」シンポジウムにおいて、ディスカッサントとして参加・登壇した発表者による報告であった。従来、アイヌ文学研究においては、アイヌと和人の関わりは、被侵略者対侵略者という二項対立的図式で語られてきたが、最近の研究において、特に口承文芸研究の観点から、坂田美奈子氏の著書で論及されているように、様々な交流があったことが明らかになりつつある。発表者は、それに加えて、琉球においても同様な事例が見いだされることを述べた。

第 2 回「旧約聖書と絵画」11 月 22 日 比較文化研究所会議室 発表者：吉田勇輔（特別研究員）

発表者は、旧約聖書を、全能の神とその神に選ばれたイスラエル民族との交流の歴史が展開されていると捉え、その歴史を①創世記と族長の時代及び②イスラエル王国の盛衰との二つに分けて説明した。①は、アダムとイヴの物語からその子のカインとアベルの相克、ノアの方舟、バベルの塔、ソドムとゴモラ等々の物語があり、最後にイスラエル紋族のエジプト入りであり、②は、モーセによる出エジプト、カナンへの帰還、王政の時代、ソロモン王の栄華時代、ユダ王国の滅亡、バビロン捕囚、最後にイエスの誕生である。ミケランジェロ、ルーベンス、レンブラント、ブリューゲル、ダヴィンチ等々の絵画を示しながら説明した。

第 3 回「日本文化の醍醐味」2 月 14 日 御井本館 144 教室 演奏者：高木青鳳（筑前琵琶）

本公演は、伝統楽器筑前琵琶による日本古典文学作品や歴史の演奏及び語りである。「平家物語」より「祇園精舎」「扇の的」、「古事記」より「天の岩戸」、歴史より創作した「蒙古襲来」、「十二支のはなし」の 5 曲が演奏され、日本古典の世界を堪能した。会場には一般市民の方も多数出席し、演奏後には、演奏で使われた二種類の琵琶に関してなど様々な質問、感想が寄せられた。本公演は久留米市の後援を受けて実施された。



琵琶奏者の高木青鳳さん



会場となった御井キャンパス本館の教室

第 4 回「海を越えた日本プロレタリア文学」2 月 27 日 御井本館 133 教室 講演者：和田崇（九州大学）

本講演は、熊本県出身作家徳永直のプロレタリア文学作品「太陽のない街」が、戦前、日本発売後すぐにヨーロッパにわたり翻訳された経緯とその理由を詳細に述べた講演であった。

1920年代30年代の日本プロレタリア文学の代表作は小林多喜二「蟹工船」葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」「太陽のない街」が挙げられている。「太陽のない街」は、実際に作家が関わった「共同印刷争議」の小説化である。日本での刊行は1929年、早くも翌1930年には、ドイツ語訳が刊行された。ドイツでの翻訳の立役者は、ドイツ在住の演劇家千田是也であった。ドイツ語訳は5年の間にスペイン語、ロシア語、ウクライナ語、ノルウェー語、フランス語、オランダ語に翻訳された。それはやはりロシア革命の影響を受けた世界的な流行の同時性であった、と述べられた。

和田崇さんの講演の様子



第5回「吉田勇輔油彩画 500点・展を語る一もの言うモノ」 3月13日 御井本館スカイラウンジC
講演者：吉田勇輔

本講演は、久留米市美術館で開催された「吉田勇輔油彩画 500点・展」について、吉田氏本人による解説である。500点という膨大な数の作品について、制作の経緯や、特徴、制作に関わる苦労話、今後の政策への抱負などが語られ、個展を鑑賞した参加者から、様々な感想や質問が寄せられ、講師から丁寧な回答がなされ、日常生活と芸術の関わりについて学ぶことが出来た。



講演を行っている吉田勇輔さん



会場となった御井キャンパス本館のスカイラウンジ

1. 本学公開講座 2024 年

九州の古代史 ―九州王朝論を中心に

近年報告における大宰府についてのまとめ 6 月 30 日

九州と海洋民族 7 月 7 日

九州の歴史民俗考 2024 ―鬼伝説と大和王権―

半島交流史を日本書紀で再考する 9 月 29 日

海洋民族と鬼伝説 10 月 6 日

2. 出版

古代に真実を求めて 古田史学論集第二十七集――倭国から日本国へ
明石書店 2024/5/4

筑後川流域圏研究部会は、専門分野を限らず筑後川流域圏に関する研究を行うことを目的としている。2024 年は、3 名の研究部会メンバー（研究協力者 2 名、特別研究員（B） 1 名）が筑後川流域圏に関するそれぞれの研究に取り組んだ。

2019 年度に「古賀河川図書館」主宰者の古賀邦雄氏より氏が収集した水、河川、湖沼に関する専門書や文学書などの全蔵書約 1 万 2 千冊が久留米大学御井図書館に寄贈されることになった。それを機に本研究部会は、その存在を広く周知し、利活用を考える研究会を開始した。2020 年度から 24 年度までの 5 年間、毎年、「御井図書館「古賀邦雄河川文庫」開設記念」を冠したシンポジウムなどを主催した。

1. 久留米大学御井図書館「古賀邦雄河川文庫」開設記念講演

帯木蓬生氏講演会『『水神』のこと、最新作『薫子 紫式部物語』のこと』（共催：御井図書館、地域連携センター、後援：久留米市）

2024 年 11 月 3 日（日）、久留米大学御井キャンパス御井本館 2 階 12A 教室において、元精神科医で作家の帯木蓬生氏による講演会（14 時-16 時）を開催した。帯木氏は、約 140 名の参加者を前に、江戸時代初期の浮羽地方を舞台に大石堰建設を構想した五庄屋を中心に農民の生活や久留米藩の統治を丹念に描いた『水神』（2009 年新潮社、2010 年新田次郎文学賞受賞）と『源氏物語』を作中作として挿入して紫式部の人生を辿る最新作『薫子 紫式部物語』（2023-24 年 PHP 研究所）に関してご自身の他の作品にも触れながら様々なエピソードを交えて表題の 2 作品に込めた強い思い（百姓を書くということ、別れをしっかりと書くということ）を講演された。高木典雄前うきは市長や大石堰関係者などの 23 年度の記念シンポジウム「筑後川・四大井堰：その歴史と未来を考える-袋野堰・大石堰・山田堰・床島堰-」の参加者の多くが来場された。

講演後の質疑応答の時間では、多くの質問が寄せられ、参加者の関心の高さがうかがえた。11 月 5 日付けの大学 web サイト「地域貢献の TOPICS」は、この時の様子を「質疑応答を通じて、皆さまが作品に対して抱かれる関心の深さと、筑後川という地域の文化・歴史に対する理解と共感が感じられる、貴重な交流の場となりました。」と伝えている。

講演会に先立って、本研究部会メンバーの浅見良露名誉教授による古賀邦雄河川文庫の紹介が行われ、参加者に同文庫の利活用を呼びかけた。帯木氏には、講演会前に御井図書館司書の工藤彩氏の案内、説明のもとで「古賀邦雄河川文庫」を視察いただいた。帯木氏は、講演会の冒頭、そのことに触れ、幅広い分野から収集された河川資料、文献に感心し、ご自身も利用したい旨を語られた。

2 テーマ別研究

（1）研究協力者 浦田義和 「丸山豊と檀一雄の戦時詩」

久留米の詩人丸山豊と久留米ゆかりの詩人檀一雄の戦中詩の比較検討を行い、その成果を以下のイベントで講演した。

イベント名：福岡県詩人会秋の筑後地区イベント「戦争と詩」

主催：福岡県詩人会

日時：2024 年 11 月 17 日（日）13：00～15：00

会場：久留米市野中生涯学習センター

講演タイトル：丸山豊と檀一雄にみる抒情精神と放浪精神

講演概要：

丸山豊は軍医として南方に派遣され、終戦直後タイの捕虜収容所で書かれた 4 行詩 28 編と戦時詩「鶴を斬る」5 篇からなる詩集『孔雀の寺』を帰国後出版した。4 行詩では、原始其の儘の自然や素朴な生活を讃美したり、或いは仏教寺院のめずらしさをうたったりと異国情緒の表現も多い。また、戦中のモードである大東亜共栄圏思想へのシンパシーや戦友愛を表現したりしている。しかし、随所に戦争

への不安や忌避が多く書かれている。戦時詩「鶴を斬る」は、4行詩と異なり、特に雲南省での戦時詩は際立って激情が吐露され死への恐怖と絶望が表現されていた。一方、檀一雄が出征の折、文学上の師の作家・佐藤春夫は「折柳曲一檀一雄の洛陽に行くを送りて」という、旅の無事を祈る詩を贈ったのに対し檀一雄は、戦地で手帖に「巖頭に立ちて歌ふ」という詩を書き付けている。この詩は佐藤春夫の詩に対する返歌の意味があり、そこには中国の悠久な歴史と大地に塗り込められた人間の悲哀が表現されている。

（２）研究協力者 河内俊英 「筑後川流域の洪水の発生と対策」

2024 年は、幸い久留米市内の洪水被害は小さかったが 2019 年、2020 年、2021 年、2022 年、2023 年と連続して住宅地の浸水が起きている。さらに北野等では、農地の浸水により葉物野菜が連続して商品にならなくなった。

住宅地の浸水の原因は、元々が水田だった所を埋め立てて住宅地にした所がほとんどである。久留米市合川小学校区では、1975 年に国道 210 号線バイパス（東櫛原-山川間）が開通した。また 1973 年に九州自動車道の鳥栖-南関間が開通した。この道路の両側にあった水田は、ほぼ宅地や事業所になっており水田のダム機能が失われた。

元々この地に住んでいた人の家は、宅地がかさ上げされていて、洪水になっても浸水することは無いよう対策されている。しかしバイパス開通後に進出した商業施設や事業所、一般住宅は、かさ上げが十分でないことから、浸水被害に遭っている。

堂前・方ら（2011）によると、合川校区の枝光、和泉、下弓削の元々の住民達の殆どは、敷地全体をかさ上げして家を建てている。合川地域の合川小学校は、少し高くなった場所に造られており、洪水を免れている。しかし、グラウンドはかさ上げが不十分なために毎年浸水する。

この学校には「あげ舟」が展示されている。あげ舟は万一洪水が起きたときに供えた舟である。かつては、水屋を持つ家は水屋ののき下に、そうでない家では土間の天井にあげ舟をつるしていたようである。堂前・方らによると、下弓削地区には、あげ舟が現存していると述べている。この地域には、水屋とまでは言えないが、あげ舟を吊るす水屋的機能を有する二階建ての小屋が存在する。合川校区のあげ舟は、本家筋・隣組・小字単位で所有されており、洪水が発生すると小学校への児童の登下校用などの交通手段として使用されていた。

北野の洪水被害は、元々水田だった場所を多少かさ上げして青物野菜・水菜や小松菜などの農業用ハウスにしたことから、毎年のように冠水被害が出ている。この冠水被害を防ぐには、大規模なクリークをつくり、土地のかさ上げと排水場所を作る以外には上手くいかないと思われる。

小松利光（2023）が述べているように、久留米市は「地形的に大雨が降りやすくて土地が低い事から」考えて、水田には適するが、畑地としては無理がある地域があり、洪水が起きやすいことを今後も覚悟した対策が必要である。

久留米市は、合川地区の洪水対策として、久留米大学のグラウンドを洪水貯留施設にしたり、公園の地下部分に貯留施設（御幣島公園・東合川 5 丁目）を建設したりしている。その他にすでに各地で実用化されている田んぼダムを実施した。また一般家庭に、助成金を出して雨水貯留タンクの設置を呼び掛けている。河内は、1987 年に 110 x 110 x 170 センチの FRP 樹脂製貯水槽を設置して雨水を貯めさらに、石井式合併浄化槽で浄化した水をポンプアップして、トイレの流し水と庭の散水用に使っている。

参考文献

堂前亮平・方 大年・高木 恵・篠倉大樹：2011 筑後川氾濫地域の水害対策に関わる土地利用の変化、筑後川流域圏の総合研究 3 久留米地域研究：87-97

小松利光：2023 第一回巨瀬川流域治水推進会議より

（３）特別研究員（B）池田博章 「地域社会における一人暮らし後期高齢者の交流状況が日常不安と相談先に与える影響」

今日の日本は少子高齢化に伴い、年少人口の減少、一人暮らし高齢者の増加といった社会問題がさら

に顕在化している状況にある。本研究は、一人暮らし後期高齢者の地域社会における交流状況が日常の不安と相談先に及ぼす影響を検討することを目的にした。2025 年問題を迎える地域社会の一人暮らし後期高齢者の実態解明や支援に資する研究として意義がある。「令和 3 年度久留米市在宅高齢者基礎調査」の一人暮らし後期高齢者 758 人のデータを基に二次分析を行った。2 つの日常生活圏域の分析には、主にクロス集計や Mann-Whitney の U 検定を用いた。対象者の近所との交流状況について、H 圏域の日常不安の回答数のみ 2 群間（「親しい友人がいる」と「あいさつをする程度等」）に有意差が認められた（ $p < 0.05$ ）。一方、K 圏域の相談先の回答数のみ 2 群間（「親しい友人がいる」と「あいさつをする程度等」）に有意差が認められた（ $p < 0.01$ ）。親しい友人の有無などの地域（近所）との交流状況が日常不安または相談先に影響すると考えられる。特に、地域（近所）との交流状況が乏しい一人暮らし高齢者に対しては、健康や介護の不安などの状態に応じて、親族＋知人・地域包括支援センター・民生委員などの相談先の選択肢を増やす支援についても考える必要がある。

なお、本研究の成果は比較文化研究所紀要（第 61 輯、2025 年 3 月発行）に記載した。

イスラーム研究部会

部会長 佐々木 拓雄

部会メンバーが各自の研究テーマ（イスラーム関連）にそった研究を進めるとともに、2024年11月15日には、徳之島病院勤務の小林晃医師を招致し、「わが〈アホなる〉人生～中村哲先生との出会い」と題する講演会を開催した。アフガニスタンで4年間、中村哲医師のもとで働いた小林医師が、イスラーム社会であるアフガニスタンでどのような異文化体験をしたか、また中村医師が現地の事情をどう捉えていたかといった問題を中心に話をしてもらった。講演会には、学生を中心として50名ほどが参加し、活発な質疑応答も行われた。

1 部会活動

昨年に引き続きスペインでの現地調査を行い、またこれまでの部会活動の成果取りまとめとして、畠中が関係するスペイン・ラテンアメリカ関連の研究会・セミナーの成果を比較文化研究所紀要(特別号)として発行する準備を始めた。次年度以降も関連セミナーを行いつつ、成果を蓄積して刊行につなげる予定である。本年度に実施したセミナーは以下の二つである。

九州スペイン研究会 2024 年度夏季大会. 2024 年 8 月 26 日福岡市, 西南学院大学

地中海地域研究部会研究会. 2024 年 3 月 28 日, 久留米大学御井キャンパス

2 部会メンバーの研究成果

(1) 畠中昌教「スペインにおける自然保護・ワインツーリズム」

本年度の研究テーマは、これまで行ってきた、スペインのワインツーリズム、国立公園など自然保護地域に加えて、歴史的景観形成と都市計画に関しても取り組んだ。スペインのワインツーリズムに関しては、DOC リオハ、DO シガレス、DOP カンガスにおけるワインツーリズムの最新動向の確認とこれまでの調査のフォローアップのため、2024 年 11 月に、スペインのマドリッド州、リオハ州、アストゥリアス州、バリャドリッド県において現地調査を実施した。ワインツーリズムと持続可能性に関連する全国レベル、地方レベルの関連組織・機関において先行研究・一次資料収集、聞き取りを行い、ワインツーリズムの全体像の把握、具体的な事例とする州・市の状況の確認、現地での観察を行った。コロナ以前と以後の変化に注目した。今回の調査の成果としては、これまで調査が不十分だったワイン蔵・ワインツーリズム関連機関・団体への追加調査が行え、ワインツーリズムの多様さが観察できたことは成果であった。上記の調査に加えて、オープンデータなどウェブサイト上に公開されているものを集めるとともに、これまでの現地調査で繋がりのできた関係者には電子メールやビデオ通話アプリなどを利用したフォローアップや追加調査を行った。また、これまでに入手した資料や情報については整理と分析を進めた。さらに、国内での先行研究や二次資料などの収集と整理、MOOC を通じて GIS、統計パッケージなどの訓練を行った。また、国内外のウェビナーへの参加することでスペインを中心とした観光地理学、ワインツーリズムに関する研究の最新動向の把握、研究者・専門家との意見交換を行った。これらの成果の一部は、2005 年 3 月に学会報告を行った。スペインにおける自然保護制度の出現と変容の概観、特にアストゥリアス州のピコス・デ・エウロパ国立公園、ソミエド自然公園、フエンテス・デ・ナルセア自然公園の地域的変容を明らかにすることを目的として 2024 年 11 月にスペインのアストゥリアス州において現地調査を実施した。具体的には、州都オビエド市、あるいは自然公園現地の管理事務所、インフォメーションセンターにおいて先行研究・一次資料収集、聞き取りを行い、アストゥリアス州の自然保護、エコツーリズムの全体像の把握、事例とする自然保護地域の状況の確認、現地での観察を行った。また、日本国内での先行研究や二次資料などの収集、整理、再検討を行った。さらに、MOOC を通じた GIS、統計パッケージの訓練を行った。「スペインにおける都市景観保全」について事典の項目執筆依頼があり、アストゥリアス州の州都オビエド市の都市空間変容と歴史的遺産保護の成果と課題を概観する内容の先行研究、資料収集、内容検討、担当部分原稿の執筆を行い、2025 年 2 月に脱稿した。

畠中昌教(2025a). 「スペイン北部におけるワインツーリズムの地域性: DOC リオハの事例」. 経済地理学会西南支部 3 月例会. 2025 年 3 月 1 日, 熊本学園大学(熊本県熊本市). (口頭発表, 日本語)

畠中昌教(2025b). 「2024 年度の研究成果報告」. 久留米大学比較文化研究所地中海地域研究部会研究会. 2025 年 3 月 28 日, 久留米大学御井キャンパス(福岡県久留米市). (口頭発表, 日本語)

(2) 池口 守 「ローマ期北アフリカの農畜産業と輸送」

ローマ期北アフリカにおける農畜産業および農畜産物の輸送の実態を明らかにするために、文献資料と考古資料を用いて分析を行った。A. King (1999) が収集したデータによれば、この地域は三大家畜のうちヒツジ・ヤギの比率が高いが、時系列で変化をみていくと、ローマ帝国の支配に服した時期にはブ

タの割合が上昇した地域がある（カルタゴなど）。いわゆる「ローマ化」の影響で豚肉を嗜好する食文化が普及したことが背景にあると考えられる。ただし、地域によってはウシの比率の高いところもあり、安易な一般化はできない（日本西洋史学会第74回大会 小シンポジウム2「古代ローマ世界における農業と社会—新しい時代の多分野共同研究に向けて」でコメンテーターとして発表）。

「ローマ帝国における技術と社会」

いわゆる古代経済史論争において、古代の経済を近代経済に類似するものと認めるには、一定期間にわたって経済成長があったことを説明しなければならない。経済成長の前提条件と考えられているのは技術革新であるが、社会的・経済的環境が新たな技術を要請した結果として技術革新が起こるとも考えられる。ローマ時代の船舶の場合、造船技術の発達と普及の時期が必ずしも一致しないことから、新たな技術が歓迎されるかどうかは地域によって異なることが分かる。これらの技術は大型船でこそ有効だったので、小型船が多数を占めた時代にはあまり普及しなかったと考えられる。

(3) 崎田誠志郎「ギリシャ・東地中海の水産資源に関する調査」

2024年度は科研費（若手研究）「ギリシャの沿岸漁場利用をめぐるローカルな規範・集合行為と漁業者組織」の2年目にあたった。本年度はギリシャに2回渡航して、現地調査を中心に研究活動をおこなった。2024年6月にはギリシャ・カリムノス島およびクレタ島で予察調査を実施した。また、ハロコピオ大学（アテネ）地理学教室のPapadopoulos Apostolos 教授を訪問して研究ミーティングをおこない、ギリシャにおける地域調査の課題や連携などについて議論を深めた。6月の予察調査を踏まえて、本科研で取り組む課題として、「カリムノスにおけるスポンジ産業の現代的形態と持続可能性」という研究テーマを立てた。スポンジ産業のネットワークは地中海アフリカ沿岸域やカリブ海などにも広がっており、国際情勢や海洋環境の影響を受けながら、カリムノスを中心としたスポンジ物質文化と経済圏がこれまで形成されてきた。しかし、カリムノスのスポンジ漁は1980年代を最後にほぼ途絶えたとされ、近年の研究の中心はその歴史的動態や文化遺産としての意義の解明に置かれている。これに対して本研究では、カリムノスのスポンジ漁が現代も形を変えながら存続していることに着目し、その実態と持続可能性を明らかにすることを目的に設定した。このテーマのもと、2025年2月～3月にカリムノスを再訪し、島のスポンジ加工業者や元スポンジ漁師、地域漁業を統括する港湾警察などへの聞き取り調査および資料収集を実施した。本研究は来年度以降も継続する予定である。

(4) 浦田義和「日本近代文学とイスラーム」

2024年2月10日から4月13日まで、エジプト国立バンハー大学でのオンライン講義を実施した。また4月22日から5月16日までエジプト現地での対面授業を実施した。

また、5月に科学研究費助成事業・研究成果報告書「日本近代・現代文学におけるイスラム表象研究」を提出した。日本近現代文学作品におけるイスラーム表象には3つの特徴がある。第1は明治初期である。西洋に対抗するアジア主義的思想をもとにした、欧米に抑圧されているアジアやイスラム諸国への同情が顕著である。第2は明治大正時代である。日本作家の外遊が盛んになるにつれ、作家の紀行文には、古代文明への興味や近代におけるイスラム国家の衰退が表現されている。第3は、昭和の時代である。南方徴用作家において、アジアのイスラム諸国と積極的に関わることで、イスラームへの関心が高まっていった。研究成果の学術的意義や社会的意義は以下のとおりである。現代日本人にとってのイスラムは、異教であり、近寄りがたいという印象が一般的であると思われる。しかし、多文化共生の時代を迎え、否応なく、相当な宗教人口を持つイスラム理解が必要である。イスラームへの関心が近代日本において皆無であったわけではなく、戦前には、主にアジア主義という政治的理由で、一定の関心があった。敗戦に伴い、イスラム研究が、中断したままになっているといえる。近代・現代の文学作品において、イスラムはどのように表象されているかを検討することは、イスラム理解の一助となる。

なお、久留米大学公開講座として、「エジプトの社会と文化」（9月6日）、「エジプトにおける日本文学研究の現状」（9月20日）について講義を行った。

2. 特別研究員B・研究員発表会

特別研究員B発表会

1) はじめに

久留米大学比較文化研究所の研究員に関する細則の改廃（2018年度施行）により、研究員の任期が5年で満了するため、2023年度より『特別研究員』に関する細則および内規を整備し、その一環として『特別研究員B』の研究発表会を新たに開始しました。2024年度は4名の特別研究員Bが当研究所に所属していましたが、特別研究員B更新の条件の1つである当発表会では2名が発表を行いました。なお、発表予稿は比較文化研究所のWEBサイトに記載しています。

2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

①日時：2024年2月21日（金）10:00～11:20

②会場：御井本館4階 140教室

③タイムスケジュール

- (1) 12:40～13:00 受付
- (2) 10:00～10:15 開会挨拶
- (3) 10:15～10:40 研究発表1
- (4) 10:40～11:05 研究発表2
- (5) 11:05～11:20 閉会挨拶

④発表形態

1人25分（口頭発表20分 質疑5分）

座長 原口雅浩（比較文化研究所所長） タイムキーパー 星野聡美（庶務課）

⑤ プログラム

	研究員氏名	タイトル
1	天満 翔	自閉スペクトラム症児のロールシャッハ・テストの特徴
2	池田 博章	地域社会における一人暮らし後期高齢者の交流状況が日常不安と相談先に与える影響

研究員発表会

1) はじめに

2006年度よりスタートした当発表会は、2024年度で第19回目の実施となりました。

2024年度は5名の研究員が当研究所に所属しており、当発表会では全員発表を行いました（1名はエジプトからZoomで参加）。なお、発表予稿は比較文化研究所のWEBサイトに記載しています。

2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

①日時：2024年2月21日（金）14:00～16:35

②会場：御井本館4階 140教室

③タイムスケジュール

- (1) 13:40～13:00 受付
- (2) 14:00～14:15 開会挨拶
- (3) 14:15～14:40 研究発表 1
- (4) 14:40～15:05 研究発表 2
- (5) 15:05～15:30 研究発表 3
- (6) 15:30～15:55 研究発表 4
- (7) 15:55～16:20 研究発表 5 (Zoom)
- (8) 16:20～16:35 閉会挨拶

④発表形態

1人25分(口頭発表20分 質疑5分)

座長 原口雅浩(比較文化研究所所長) タイムキーパー 星野聡美(庶務課)

⑤ プログラム

	研究員氏名	タイトル
1	三橋 優介	介護支援専門員の地域の社会資源との連携における現状と課題 ー管理者へのアンケート調査からー
2	小田村 悠希	障害者支援施設における生活支援員のキャリア形成について ー文献検討からみる研究動向ー
3	許 東升	中国の都市部における認知症高齢者のコミュニティーケアの現状と課題 ーコミュニティーケアシステムの構築を目指すー
4	永吉 守	大牟田・荒尾におけるユンヌンチュ・エスニシティ ー大牟田「大蛇山・一万人の総踊り」参加と奥都城
5	Ghada Abdelkareem	アラブ現代詩と日本現代詩に於けるプロレタリア詩 ーアル・アダーブグループの詩と列島グループの詩を中心にー

3. 日誌

2024年（令和6年）

4月24日（水）	比較文化研究所運営会議
6月5日（水）	比較文化研究所運営会議
7月1日（月）	比較文化研究所会議（書面）
9月2日（月）	比較文化研究所運営会議
9月4日（水）	比較文化研究所会議（書面）
10月2日（水）	比較文化研究所運営会議
11月6日（水）	比較文化研究所運営会議
12月4日（水）	比較文化研究所運営会議

2025年（令和7年）

1月8日（水）	比較文化研究所運営会議
1月21日（火）	比較文化研究所会議（書面）
2月5日（水）	比較文化研究所運営会議
3月5日（水）	比較文化研究所運営会議
3月13日（木）	比較文化研究所会議（書面）

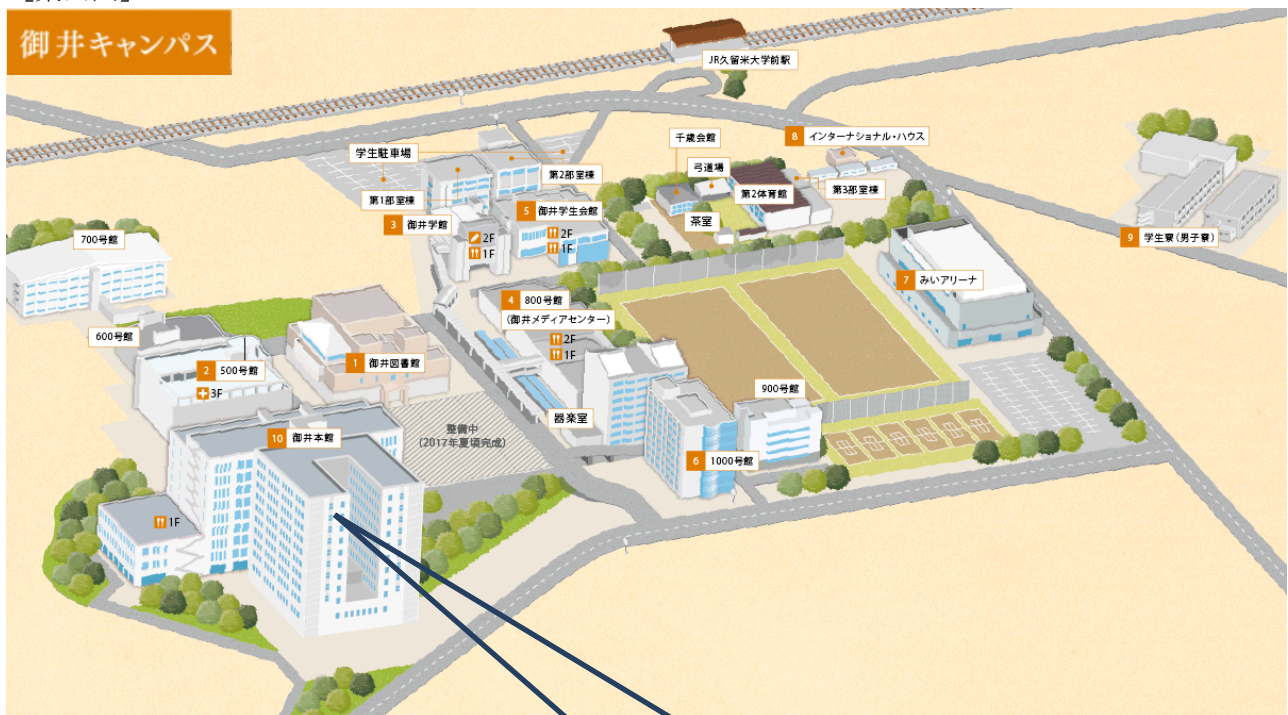
※部会活動を除く

施設・設備

比較文化研究所は、1987年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館3階に設置されましたが、大学院比較文化研究科が開設された1989年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移りました。その後数回の移動を経た後、2015年3月に現在の御井本館8階に移動しています。研究所の部屋は3室あり、それぞれ研究所長室、会議・研究会用、および資料室・作業室として使用しています。

研究所の資料室には、紀元前3世紀に不老不死の薬を求め渡来したと伝えられる「徐福」に関する図書が保管されていました。これらは、元佐賀テレビ副社長の故・内藤大典氏によって収集されたものであり、大矢野栄次氏より博多大学準備委員会に寄贈されました。

[案内図]



御井本館 8階
○比較文化研究所長室
○研究室
○共同研究室